平成 26 年度ご挨拶 歯医者復活戦!

歯科心身医学分野 豊福 明



た長女は、今春、歯学部に入学することになりました。世襲を推奨する訳ではありませんが、自分の職業を我が子に勧められないプロフェッションも情けないと考えました。高校の進路指導で「医・薬・看護」学部は強く薦められる一方で「歯学部」という選択肢が一切提示されなかったのも実に気に入りませんでした。確かに丁度、8,9年前から謂れのない歯科バッシングが強まり、歯科界はすっかり元気を無くしたままです。

しかし、毎日の自分の仕事を鑑みると、「歯科には、憧れ目指すに足るものがある」と改めて確信しました。この職業は、私に30数年前に志望した時に思い描いていたものよりはるかに大きな遣り甲斐と誇りを与えてくれたからです。人が人を診ること、病苦と一緒に闘うこと、そして時に癒すこと、苦しみ、困っている人を助け、感謝される仕事は実に幸せな挑戦と言えます。さらにこの職業ならではの自由度の高さはどうでしょう?ある程度ゆとりを確保しつつも患者さんを元気にできる仕事を選んで良かったと心底思います。

さらに今は治せない病気を治せるようになるための研究をすること、今治せる病気ももっと早く簡単に治せるように工夫を重ねて行くことも非常に楽しく遣り甲斐のある仕事です。この臨床と研究の過程で、学部の学生さんや大学院生の先生たちと一緒に学んで行けることも大学院大学の大きな魅力だと今更ながらようやく実感してきました。

大学が高校までと違うのは、教科書に載っていることを一方的に教えるのではなく、教科書にこれから載るような事実を一緒に発見して行くことにあります。実は前職で当時福岡大学病院院長をされていた有吉朝美教授から「大学の魅力は教育だ」と言われたのですが、自分のことで一杯いっぱいだった当時の私にはピンと来なかった思い出があります。こういうことだったのかなと遅まきながら、先達のお言葉をかみしめています。我が国で最優秀の歯学生たちと、楽しみながらこの学問領域を切り開いていけるのは非常に有り難い環境です。

正直、上京直後は無我夢中でした。後でいろいろ感傷的になるだろうとは予

測していました。この数年、少しずつ人も育ち、仕事にもゆとりが持てるようになってきました。自分がここに居ることの意味、天はなぜこうしたのか、いまだ分からないことですが、国民の税金で歯科医師にならせてもらった以上、自分が身を置いたこの歯科領域で幾ばくかでも国民に恩返しできればよいのだろうと勝手に解釈しています。

本年度は春から2名の大学院生と医員1名交代でスタートしました。ますます女子優勢の華やかな人員構成となりました。



8年経過というと定年までの 1/3 が終ったことになります。ある歯科系雑誌の取材で「この8年の成果は何ですか?どのくらい目標達成できましたか?」と問われて、深く考え込んでしまいました。

早速、当科の診療実績を見直してみました。

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	小計
初診患者数	568	412	373	425	419	626	618	3441
舌痛症	243	231	222	230	226	332	309	1793
非定型歯痛	130	95	54	82	76	116	136	689
咬合異常感	55	18	25	48	34	41	64	285
口腔異常感症	113	110	109	111	117	165	143	868
顎関節症	47	29	30	21	19	25	26	197
口臭症	3	6	3	7	5	4	7	35

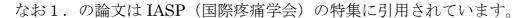
(2015年3月31日現在、重複含む)

新患数の伸びはもちろん、歯科領域に特化した疾患群が順調に増加していました。若い先生方の頑張りのお陰ですが、さらに診療の質を向上させ、治療成

績の上昇を目指しているところです。

研究面では、大学院修了者は博士課程 6 名、修士課程 1 名となり、博士論文 テーマは以下の通りです。

- 1. 舌痛症と非定型歯痛の精神科診断名(臨床疫学)
 - NEUROPSYCH DIS TREAT 2010 (Impact Factor: 2.154)
- 2. 舌痛症に対する SNRI の用量反応性(精神薬理学)
 - CLIN NEUROPHARMACOL 2011 (Impact Factor: 1.836)
- 3. 歯科インプラントの不定愁訴の心身医学的検討 日口科誌 2012
- 4. 舌神経圧迫モデルラットによる慢性疼痛実験 (病態生理学)
 - Mol Pain 2012 (Impact Factor: 3.531)
- 5. 口腔セネストパチーの SPECT 所見(脳機能画像研究)
 - EUR ARCH PSY CLIN N 2013 (Impact Factor: 3.355)
- 6. Phantom bite syndrome の精神科疾患の共存率と薬剤反応性(臨床疫学) *J Psychosom Res. 2015 (Impact Factor: 2.839)*





秋に大学院生の渡邊先生の学位論文受理と舌野先生の矯正専門医合格お祝いもできました。渡邊先生は子育でもしながら見事に家庭と学業を両立させました。PBSの精神疾患との共存率と薬剤反応性に関する研究で、Psychosom Resに掲載されました。この後、間もなく2本目の論文もacceptされるという快挙

を達成しました。こちらは本学医学部精神科・放射線科との共同で行った口腔 セネストパチーの脳機能画像研究です。似たような口腔症状でも、うつ病の既 往の有無で脳血流パターンの相違があることを明らかにしました。

修士2年の鈴木先生(歯科衛生士)も舌痛症の口腔乾燥と薬剤の影響に関する研究をまとめ、無事学位審査に合格しました。

臨床が出来ない人間が臨床研究などすべきではない、と考えています。保険に縛られ「打つ手が無い」と安易に投げ出すのは歯科医師失格。データが乏しいところで工夫が出来るのがプロの臨床医. エビデンスを生み出すために治療法をいろいろ改良するのが大学人の仕事だと思います。

毎週金曜日の朝の大学院生の先生たちと英文抄読会に加え、水曜日に輪読会を開始しました。まずは長嶺敬彦先生著の「予測して防ぐ抗精神病薬の「身体副作用」—Beyond Dopamine Antagonism」を読み解きました。後述する長嶺先生との邂逅も大きなきっかけでした。



地道にコツコツ、と上記の学位論文以外にも精神科・放射線科との共同研究 も少しずつ形になってきました。

1. Comparison of cerebral blood flow in oral somatic delusion in patients with and without a history of depression: a comparative case series. Watanabe M, Umezaki Y, Miura A, Shinohara Y, Yoshikawa T, Sakuma T, Shitano C, Katagiri A, Takenoshita M, Toriihara A, Uezato A, Nishikawa T,

Motomura H, Toyofuku A. BMC Psychiatry. 2015 Dec;15(1):422. Epub 2015 Mar 10. (Impact Factor: 2.237)

- 2. Oral Dysesthesia Rating Scale: a tool for assessing psychosomatic symptoms in oral regions. Uezato A, Toyofuku A, Umezaki Y, Watanabe M, Toriihara A, Tomita M, Yamamoto N, Kurumaji A, Nishikawa T. BMC Psychiatry. 2014 Dec 21;14(1):359. (Impact Factor: 2.237)
- 3. Improvement of asymmetrical temporal blood flow in refractory oral somatic delusion after successful electroconvulsive therapy. Uezato A, Yamamoto N, Kurumaji A, Toriihara A, Umezaki Y, Toyofuku A, Nishikawa T. J ECT. 2012 Mar;28(1):50-1. (Impact Factor: 1.387)

この様な研究業績も学内はもとより非常勤講師の本村先生をはじめ、いろいろな先生方の御指導の賜物です。今年度の夏には北里大学衛生学の星先生に臨床に関する統計学をご指南頂きました。星先生とは約20年前にベルギーで開催された国際口臭学会でご一緒して以来のご縁です。ありがたいことです。



(肝心の勉強中ではなく, 懇親会の写真ばかりで恐縮です)

4月には東京大学麻酔科・痛みセンターと慢性疼痛について合同の勉強会を 開催致しました。慢性疼痛に対する認知行動療法を御専門とされる笠原諭先生 と整形外科の松平浩先生たちと楽しくも深い議論ができました。お互いにオー バーラップする病態も多いので、今後のコラボに期待できます。



第29回日本歯科心身医学会は7月に横浜で神奈川歯科大学の主管で開催されました。2回目となるPIPCセミナーも大好評でした。来年は当分野主催です。30周年記念スペシャルバージョンをお願いしています。



PIPC セミナーでは 11 月に福井大学にもお邪魔し、ER で超有名な林寛之教 授と御一緒できました。相変わらずお茶目な林先生でした。やっぱり第一線の現場の先生方と触れ合うのはとてもうれしいものです。



2年前の順天堂セミナーや福島県立医大セミナー以来、立派になった若い先生 たちと久闊を叙すこともできました。



現場と言えば、第 6 回「こころとからだの救急学会」にも参加しました。福井大学の寺沢教授の謦咳に触れ、臨床にかける情熱を頂きました。この学会は同志と集う貴重な機会でしたが、諸般の事情により今回で一旦解散というのが残念でなりません。



「現場の人」、ということでは以前からお会いしたかった長嶺敬彦先生を岩国市のいしい記念病院までお尋ねしました。自治医大を御卒業後、長らく精神科病院の内科を実践され、特に向精神薬の副作用について多くの論文や書籍を発表されています。非常に科学的に思考をつめて、複雑な現象に新しい切り口を提示しておられます。おだやかなお人柄と「至誠」という座右の銘とがすぐに結びつかなかったのですが、いわば末期状態の患者さん等も拝見させて頂き、現場の厳しさが沁みました。巷にはびこる無責任な医療批判ではなく、臨床は必ずしもうまく行くことばかりではない、次はこういうことがないように、というまごころが先生を研究に駆り立てているということがよくわかりました。



広島大学歯学部の講義の際に同大学救急医学の谷川教授を表敬訪問致しました。福岡大学病院救命センターで大変お世話になった先生です。なんと今春から福島県立医大に異動されるとのこと。あっという間に広島大学に高度救命センターを立ち上げられ、念願のドクターへリも飛ばされ、次はフクシマへ。以前から「定年まで大学にしがみつくつもりはない」と力強く語られていました

が、その高貴な志と気概に感激しながら御著書にサインを頂きました。

福井といい、山口といい、広島といい、全国各地にこんなに優れた先生がごろごろしているというのは本当に恐るべし、です。東京でうかうかせずに、もっともっとより良い医療を求めて精進しないといけません。

高齢有病者が当たり前になり、今後ますます従来型の歯学部での臨床経験では対応できない状況が増えてくるでしょう。学生さんたちには、一度は病院歯科や医学部歯科口腔外科での研修を薦めています。自分では意識していなかったのですが、ずっと歯学部育ちの先生方とは思考や判断の基準となる臨床経験の量と質が異なることに気づいたからです。歯科界の更なる発展のためにも幅広い臨床経験と優れた医師との出会いが必須だと切に思っています。その機会を少しでも多く若い人たちに提供するのも私たち世代の仕事でしょう。



そういうことをあちこちで煽っていたせいか、夏休みに北大歯学部 5 年の学生さんが見学に来られました。早いうちから自分のキャリアを考えていく、思ったら直ぐに実行に移す、その真摯な姿勢にいたく共感しました。歯科界の未来もまんざら捨てたものではありません。



東南アジアの歯学部学生さんも見学実習に来られました。そもそも日本国内だけで手一杯なのですが、来年度には当分野初の海外留学生受け入れが始まる可能性も出てきました。言語や文化性の違いを乗り越えて「歯科心身医学」の神髄が伝えられるか、新しい挑戦も待ちかまえています。



平成27年度のメンバーです。今年も歯科心身医学会の主幹など大仕事が待っています。男子率も少し回復しました。やはり、こころも見据えた臨床と研究が出来る歯科医師の育成が教室のテーマです。 (平成27年4月14日記)